# イーサル川

斎藤茂吉

青空文庫

イーサル川は南の方のアルプス山中から出て、北へ向つて流れてゐる。分水嶺は既に独逸の国境を越して墺太利の領分になつてゐるので、さう手易く其処を極めることは出来ないやうである。

川の沿岸には、〔To:lz〕《テルツ》、〔Mu:nchen〕《ミユンヘン》、Landshut《ランヅフート》、Landau《ランダウ》などの町があり、ミユンヘンはそのうちで一番大きい。川は道を稍東の方に取つて、Deggendorf《デツゲンドルフ》の近くに来てドナウに這入る。〔To:lz〕《テルツ》からもつと水上に Lenggries《レンググリース》といふ一小邑があり、眺のいい城がある。Hohenburg《ホーヘンブルク》の城といふのはそれである。

ドナウの流れは『藍のドーナウ』と謂ふが、ここは、『緑のイーサル』である。〝〔Solang die gru:ne Isar, durch's mu:nch'ner Stadt'el geht.〕〟といふ古い歌謡は、ミユンヘンの市民が麦酒に酔うてよくうたふのであつた。

私は西暦一九二三年の夏にこの土地に来、翌年の夏までゐたので、屡この川に親しみ、心に憤怒があり、心に違和があるときには、いつも私はひとりこの川べりに来て時を消すことをしてゐた。

ここに来て間もなく日本大地震の報に接し、前途が暗澹としてゐた時にも私はよくこの川原に来た。まだ気候が暑いので、若者に童子を交へて泳ぎ、寒くなると砂原に焚火をしてあたつて居る。そこから少し離れたところに少女の一組が泳ぎ、中にはもう体の定まつたのも居り、稍恥を帯びた形をして水から上がつて来たりして居る。川は概して急流であるが、流が緩慢のところがあり、さういふところを尋ねて彼等は泳いで居る。ここの川にも矢張り支流があつて、流れ込む有様が見えてゐる。流の岸は人造石の堤防で堅めてゐるので、水は割合に激せずに流れるのであるが、それでもその堤防の損じた処がところどころにある。恐らく春の雪解の季節に洪水のする為業であるだらう。長い木の橋が掛かつてゐたりして、そこを大勢の人が往来してゐる。日曜の散策であるがここの住民は、維也納などに比して都雅でなく、山国の趣が抜けないやうに見える。

ある日、友人の家で日本飯を焚いてもらひ、それに生卵をかけ大根に塩を附けながら食つた。満腹してここの川原に来るといい気持である。川原には砂原の上に川柳の一めんに生えたところがある。豌豆のやうな花の咲いた細かい草などもある。向うの土手のところに山羊の一群が居り、少女ひとりが鵞鳥の一群を遊ばせてゐたりする。生れ故郷の日本のやうに、蝉のこゑも聞こえず、きりぎりすのやうな夏の昆虫も聞こえない。かういふ静かな川原の柳の木蔭に、潜むやうにして私がゐると、『ヒネエゼ！』かう突然こゑがして、ひとりの童子が向うの柳のかげに隠れたりする。

また、或る夏の暑い日曜にここの川原を歩くと童幼が砂をいぢつて遊んでゐる。一人の小さい男の子が急がしさうに私の傍に来て何か言ふ。が、私にはちつとも分からない。私は三度も四度も問返して辛うじて意味だけが分かつた。『ぼくの妹の靴紐が長過ぎますから、切つてやらうとおもひます。小刀を持つて居りませんか』かういふのであつた。私が非常に骨折つて理解した独逸語は如是のものに過ぎぬ。いま当時の日記を検するに、これは九月二十三日のことで、『嗚呼、言葉はむづかし』と書いてある。

また或日、この川に掛かつてゐる町中の橋の上に立つて、急潭のさかまくのを見てゐた。それから橋を渡つて木立の中から水際に下

りて行き、二時間ばかり水を見てゐた。太陽が傾いたので飛沫のうちに虹が暫く立つたりする。イーサル川が二わかれして、その中に此処の木立がある。木立の中には今は誰もゐず、ある数学者の銅像が一つある。私はゆうべ見たヒマラヤ山中の活動写真の光景などを思浮べ、しきりに眠気を催すのであつた。二わかれした向うの流の方には釣してゐる者が五六人ゐる。市場で買へば手取速く済むのに、気長に釣つてゐるところは、東洋国の風習とちつとも変りはない。何向き、市街の真中にかういふ河水の怒濤を見るのは気味がいいのである。

ある日、軽い頭痛がして川原を歩いてゐると、出て来た雲が見る見るうちに険しくなつて来、むかうに鳴つてゐた雷が急速度に強まる気配がしたから、兎に角土手の方へ急いだ。川原にゐた老若男女も慌しく駆歩などをするので、これは降るかも知れんといふ気がしてゐるうちに、もう大滴の雨が落ちて来た。雷が既に頭のうへに来て鳴るので、為方がない、差向むかうに見える記念塔のやうなところまで駈出した。合著の服をだいぶ濡らしてそこまで辿りつくと、土地の人で一ぱいである。そのうち川原も川向うの市街も見界が付かぬばかりに打けむつて、銀線のやうな雷雨が降つた。雨やどりしてゐる男女老若は笑談などを云ひ云ひ、一歩も動くことが出来ずに居る。そして口ひげの長い翁などが隣の娘に何かいへば皆がどうつと笑つたりする。どこの国土でも同じい恋愛か何ぞの言葉であらうが、黄色人種の私ひとりが身動きも出来ずにしばらくさういふ気分の中にゐるのも亦一つの情趣である。三十分も経つたころは、もう向うの空にはけろりとした按排に瑠璃色のところが見え出して居る、さういふこともあつた。

そのうち追々気候が寒くなつて行つた。十月廿一日、広い森林を抜けて川上の方へ行つたときには、広い葉の並木はしきりに落葉し、さういふ散しいた落葉を踏んで私どもが歩いて行つた。林中には樅が生ひ茂つて、その木下には茸の群生した所もあつた。そこを通抜けると、紅葉して黄色く明るくなつた林を透して深い谿間が見える、その谿間をイーサルの川が流れてゐるのである。川は紺碧になつて川原をつくつて流れてゐる。谿間を隔てて向うは二たび一つの高原を形成してゐる。高原は一めんに紅葉し、静かな家がそこここに散在してゐる。見おろして見てゐるイーサル川は如何にも寂しい。途中で麦酒を飲み、そこを出たときにはもう対岸の家に燈火がついてゐた。途中で連れになつた独逸人があるところまで来ると、対岸の一つの家のあたりを指して、ルウデンドルフ将軍はあのへんに居ります。と教へて呉れた。イーサル川は、かういふ断崖の間をも流れるのである。

十月廿八日、けふも一人で『緑の森』と謂ふ方に行つた。今朝、靴下、越中褌などの洗濯をし、下半身を冷水で洗つた。心が平衡を得てゐるやうでもあり、不安なやうでもある。地震のため、いまの為事を棄てて帰国せねばならぬとして、陸路を取るにせよ海路を取るにせよ千円はかかるのである。そんならその旅費だけの分をミュンヘンに踏留まつて勉強しようか。と、斯う心を極めたのであつた。心が平衡を得たやうに思ふのはそのためであつただらうか。林をいで、散り敷いた落葉のうへに来て憩ふともなく憩ふに早くも眠気を催したので、頭を垂れたまま半時ばかりの仮寝をした。国民党の旗を立てて多勢の遠足隊が私の前を通つたのをも半眠のやうな状態で意識してゐた。身に寒気して目が醒め、それからイーサルの川の方

に下りて行つた。此処に来るとまた別様に寂しい。私から少し離れたところに童子がゐてしきりに谺を起してゐる。童子が、ハルロー！　といふと、それが五つも六つもの谺になつて遙かの方に消える。童子が、イイヤー、ホホー！　といふ。谺が消えてしまふとまた其を繰返す。童子の声は澄んで清い、そして或る節奏を持つた間を置いてそれを繰返してゐる。私は、自身欧羅巴に来てゐることを確然と意識せざることを得なかつた。

そこを去つて川上の方に行くに、林中から湧いた泉が流になつてそそぐところがある。そこに二人の童子が一人の守に連れられて遊んでゐた。そこを通過ぎようとすると、一人の童子が来て、時計はもう幾時でせう？　といふことを訊いた。守の方は十六七歳にもならうか可哀らしい顔をしてゐるので私はいろいろ話をして見ようとして近づいた。然るに童子のなれなれしく振舞ふに似ず、守の娘は決して私に狎親しむことをしない。私が数語を以て問へば数語を以て答へるのみである。この地の処女に如是の躾もあることを思ひ、興あることに思つたので、挨拶をして其処を去つた。

気候が寒く、その間に Hitler《ヒツトレル》の騒擾があつたりして、川べりにも来ずにゐた。年の暮になり日本の留学生と議論して憤怒したときにも川べりに来たのであつたが、その時には川原は一めんの雪で蔽はれ、私は川原におりて行かずにしまつた。

寒い冬に閉ぢられ、慌しく日を送つてゐるうちいつか春になつた。雪が解け、草が萌え、そして日光の美しい五月が来た。五月十一日の日曜に久しぶりに川べりに来ると、対岸の町に市が立つてゐる。いろいろ価の廉い日用品、食料品を商ふ市で、主に労働階級の者を相手にしてゐるやうである。川魚を天麩羅にして売つてゐたり、著類の競売などは幾組もある。鉛筆のきずもの、刃物類を山のやうに積んで売つてゐたが、この中で私は大根卸を一つ買つた。瀬戸物のところに行つたとき、瀬戸でこしらへた日本娘が三とほりばかりある、それを私は買つた。安芝居があり、人形芝居がある。人形芝居は見料は客の自由で、児童は無料だから、幕のなかは児童で充満してゐる。大蛇などが出て来て頭の禿げた猟人を呑むところをやると、児童らは大ごゑをあげて、アア！　などといふのでひどく愉快である。労働者達もけふは日曜なので帽も服も他所行のを著、なかには男の子を肩車にして、妻を連れて歩いてゐるのなどもある。路傍に立つて心霊療法の本を売つてゐるのにも労働者等がたかつてゐる。心霊者は髪を長くして、時々医学上の術語を使つたりしてこれも甚だ愉快である。私はこの市で婦人のかぶる頭巾地を三四枚買つた。これは山村の女のかぶるものだが、日本の風呂敷になるのである。そのなかには太陽の光を模様にしたやうな図案などもあつた。五月十八日の日曜も同じやうに市が立つた。盛な人出で驢馬に児童を乗せるところなどは一ぱいになつてゐた。安息日の日曜に商売の市の立つのも私には面白かつた。維也納ならば Messe《メツセ》のやうな大きな市を除き、それから Prater《プラーテル》のやうな遊び場所を除けば、日曜に働くのは猶太族の仕業だぐらゐにおもふのであつた。

五月廿五日、川べりを歩いてくると植木園がある。なかには日本の藤の花を咲かせ、芍薬、石竹のたぐひを植ゑてゐる。楓の葉が紅くのび、ぼけの木があり、あやめがある。これは個人の経営だが私にはやはり心を引くものがあつた。雨が振つて来たので傘をさしていつまでも園中を逍遙したが、芭蕉・蕪村の趣味から行けば、晩

春・行春の気品といふべきである。私は秘かに思うたに、この経営者の趣味は、戦前からの惰勢ではあるまいか。戦前には多くの日本留学生が此地に居り、日本飯を焚ぎ、牛肉の鋤焼をし、窓前に紅い若葉の楓盆栽をおいて、端唄浄瑠璃を歌つたその名残ではあるまいか。

六月一日、Spetech《シユペテツヒ》といふ民顕の図書館員と共に汽車でイーサルに沿うて溯つた。けふの午前には在郷軍人の記念儀式があつたので、それを見てそれが終つてから汽車に乗つた。汽車で暫く来て Ebenhausen《エーベンハウゼン》といふところに来た。ここのイーサル川は川下よりも川幅が広く、人々が短艇を漕いで遊んだりして居る。さう暑くもないのに泳ぐものがゐる。シナ人二人が一人の独逸女と連立つて私等のまへを行くが、いい独逸語を使つてゐた。川の水は此処は少しく白く濁つてゐる。近くに僧院があり、そこに多くの少年が養成されてゐる。その少年の読経するところなども私らは見た。Spetech《シユペテツヒ》君は麦酒を好み、私も敢て辞せぬので二人はいい心地になるまで飲んだ。けふの遊はイーサル川に来た最後の日になつた。

私は一度、〔To:lz〕《テルツ》に行かうと思ひつつ遂にその念願を果さずにしまつた。〔To:lz〕《テルツ》はイーサル川の上流にある町で、沃度・曹達・硫黄を含んだ鉱泉が湧くために一つの浴泉地にもなつてゐる。私は此処のイーサル川の美しい有様を絵葉書で見て時々夢想を馳せたのであつたが、私の生涯のうちにはそれが出来なくなつてしまつた。

# 青空文庫情報

底本：「斎藤茂吉選集　第九巻　随筆」岩波書店
　　1981（昭和56）年2月27日　第1刷発行
初出：「改造」
　　1929（昭和4）年10月
入力：しだひろし
校正：門田裕志
2012年4月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# イーサル川

斎藤茂吉

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/